國學院大學学術情報リポジトリ

兎か狐か教育者か：ブッカー・T・ワシントンが「文学嫌い」な理由

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 福井, 崇史, Fukui, Takashi
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000449

兎か狐か教育者か
—ブッカー・T・ワシントンが「文学嫌い」な理由—

福井崇史

0．序

アメリカ連邦議会は2008年２月、建国以前から19世紀半ばまで続いた奴隷制、ならびに19世紀末以降における人種主義の発現形態であるジム・クロウ（Jim Crow）の余波に、アフリカ系アメリカ人の人々が「苛まれ続けている」[(1)]ことに対し（Smock 8)、謝罪の意を表する決議を採択した。そのジム・クロウ全盛の時期に、トマス・ディクソン（Thomas Dixon）のような「黒人」嫌悪の人種主義者たちと、デュボイス（W.E.B. Du Bois）やアイダ・ウェルズ（Ida B. Wells）といった先鋭的「黒人」活動家たちとの板挟みに遭いながら奮闘していたのが、ブッカー・T・ワシントン（Booker Taliaferro Washington）であったことは夙に知られる通りである。

ワシントンを「極端に評価の分かれる人物（a polarizing figure)」と評するレイモンド・スモック（Raymond Smock）が言うように、「英雄／悪漢、モーゼ／アンクル・トム、どのように見るにせよ、[ワシントン]の物語は、アメリカ史ならびに黒人史の欠くべからざる一部である」（４）ことに変わりはない。そして、そうした相反する評価を惹起する多面性が彼にあったことは生前にもある程度認識されていたが、その死後も、さらに21世紀に入った近年においても、ワシントン像は変化を続けている。1970年代のルイス・ハーラン（Louis Harlan）による伝記作品の発表からワシントンのイメージは決定的に変化し、「従順な兎」のように見えて「狡猾な狐」でもあったことが知られるようになっただけでなく（Smock 13)、さらにそれ以降も、スモックによる2009年の伝記や、2012年にビーズ（Michael Bieze）とガスマン（Marybeth Gasman）が上梓した『ブッカー・T・ワシントン再考（*Booker T. Washington Rediscovered*)』といった著作は、古い世代が作り上げた「概ね妥協主義的で非武闘派」（Fisher 711）というワシントン像を、大胆に見直しつつあるのだった。

このようにますます複雑化するワシントン像だが、彼にまつわる動かしがたい

定説も存在する。それは、彼の代表的著作である1901年出版の『奴隷から身を起こして（*Up from Slavery*）』（以下、『奴隷から』）を、「感動的な、黒人版ホレイショ・アルジャー（Horatio Alger）的物語」（Bieze and Gasman 17）、あるいは「最初の黒人版『ボロ着から金持ちへ（rags-to-riches）』型成功譚」（Smock 130）というように、この作品を、19世紀末から今日まで続く「アメリカン・ドリーム」神話の原型的文学作品である、いわゆる「アルジャーもの」になぞらえて捉えることが、半ば慣習化されているということだ(2)。だが、興味深いのはこの慣習化そのものではなく、その主著を頻繁に「アルジャーもの」に喩えられている当のワシントン自身は、自身の名を冠した複数のテクスト上で、「文学」を嫌悪する旨の、あるいは「反文学」的な文言を、書き連ねていることなのである。

本稿は、彼の「文学嫌悪」に関するある論者の主張を叩き台とすることから始め、ブッカー・T・ワシントンという人物の複層性を見渡せる現在的な視座から、この論点について再考する試みである。

1．「表象はモノそれ自体に劣る」のか

まずは、ローラ・フィッシャー（Laura R. Fisher）の2015年の論考における見解を、叩き台として提示したい。彼女は、「ワシントンの（…）反文学観は、あるモノの表象は、モノそれ自体に明確に劣る、という表象理論を指し示すもの」（723）であると、すなわち、彼の反文学的姿勢は、「表象はモノそれ自体に劣る」という考え方と、不可分に結びついているとしている。

果たして、そうなのであろうか。

前述したように、確かにワシントンは様々なテクスト上で反文学的な文言を書き連ねている。だが、それには彼の「実学主義」的傾向が大きく関わっているのであり、そのことは、以下に見るように彼の仮想敵が、文学以外にも語学や法学、神学や天文学など、実学（被服や建築など）以外のあらゆる学問体系であるところからも明らかだ。例えば、1899年の著書『アメリカン・ニグロの未来（*The Future of the American Negro*）』において、19世紀末のアフリカ系アメリカ人を巡る教育の現状について、ワシントンは次のように嘆いてみせる。

> 少年たちは農場から連れてこられ、法学や神学、ヘブライ語やギリシャ語についての教育を受ける――つまり、彼らが最も知るべき事柄以外の、ありとあらゆることを教えられるのだ。（49）

> 天文学や神学、ギリシャ語やラテン語を教えることの出来る［アフリカ系アメリカ人の］人物なら幾らでも見つけることが出来るのだが、衣服の作り方、つまり我々誰もが、一年のいかなる日においても使わないでおれないものの

> 作り方について教えられる人間は、一人だって見つけるのは困難なのである。(50)

奴隷制から解放されて30年、アフリカ系アメリカ人に対して国家も慈善団体も、言うなれば「生きる術」を教えてこなかったことに気付かされ、ワシントンは幾度も「心の沈む思い」(51) を覚えたと記している。つまり、「ニグロの男性も女性も、プランテーションで250年あまりに渡って何が行われていたかについて何も考えず、文学、数学、自然諸科学についての教育を受けている」(55) ことが、ワシントンには是認できないのだった。だからこそ同書の後半では、やや極端ではあるが、「我々の間での犯罪の多くは、若者の怠惰さに起因しているのであり、その理由から、私は常々、文学的/読み書き修練 (literary training) と共に、手仕事 (some industry) も教えられるべきだと主張している」と記しているのである (193)。

ただ、フィッシャーが上のように主張する直接的な根拠は、ワシントンが『奴隷から』に書き記す、次のような文言である。曰く、新聞は読み過ぎるくらいに読み、楽しみと息抜きの源泉だが、「フィクションは、あまり好きではない (Fiction I care little for)」とした上で、彼はこう続ける。

> 読み物で最も好きなのは、伝記である。私は、自分が読んでいるものが、現実の人間や現実の事物 (a real man or a real thing) についてのものであって欲しいのだ。(155)

> どうした訳か、私は出来る限り自然に触れたいのであり、人工的なものや模造されたものではなく、本物 (the real thing) に触れたいのである。(156)[3]

こうした記述を踏まえて、「若い頃には古典の素養がないことを恥じていた」(Fisher 722) ワシントンが、「リベラル・アーツを教える機関で伝統的に行われていた文学修養は、黒人大衆の生活に何ら意味のないもの」(718) と考えるようになり、文学を、思考や気分を抽象的に変化させるだけの「些末かつ危険なもの」(722) と捉えるだけでなく、「それ自体を目的として文学を読むことに対する敵意」をも抱くようになった結果、彼は「実物/本物」や具体性を志向する方向へ向かったのであり、それが彼の、「反表象的で、『目で見て触れられるもの』への志向性」(730) と、そして「表象はモノそれ自体に劣る」という考えと不可分に結びついていると、フィッシャーは論じているのである。

しかし、フィッシャーのこの見解に対しては、複数の観点から掣肘を加えておかねばならない。一つには、「表象はモノ自体に劣る」から価値が低い、と考えるのは、あくまで現在的な視点から19世紀末的リアリズム観を忖度した結果にす

ぎないのではないだろうか、という疑念がある。同時代においても、例えばヘンリー・ジェイムズは1892年の短編「ザ・リアル・シング（“The Real Thing”）」において、本物あるいはモノそれ自体よりも、むしろ表象されたものを偏愛する画家を語り手として描き出しているのであり、19世紀末の人間に、常にモノ自体がその表象よりも価値あるものと認識されていたと断ずるのは、やや性急な所作のように思われるのだ。

フィッシャーの見解に、上とは全く別の角度からさらに掣肘を加えておきたいが、そのためには、オックスフォード版『奴隷から』の編者であるアンドリュースによる指摘と、フィッシャー自身もワシントンに関する最新の知見をもたらすものとして引いている、ビーズとガスマンによる著作からの指摘を、是非とも確認しておかねばならない。自身が校長を務めるタスキギー・インスティトュート（Tuskegee Institute）の運営資金集めに忙殺されていたワシントンは、最初の自伝的著作である1900年の『我が人生とその成果（*The Story of My Life and Work*）』を執筆する際、「経験豊かな黒人ジャーナリスト」（Andrews x）であるエドガー・ウェバー（Edgar Webber）を編集アシスタントとして迎え入れたのだったが、「しかし1899年の中頃には（…）、ウェバーはその本の大部分を執筆するゴースト・ライターとなっていたのだった」（同上）。それだけではない。そもそも『奴隷から』も、「ある白人ジャーナリストがゴースト・ライターとなって書かれた」ものなのである（Bieze & Gasman 18）。こともあろうに、自身の自伝をゴースト・ライティングさせている人物が、「表象はモノ自体に劣るから」といった、ナイーブなリアリズム観を根拠として反文学の姿勢をとっていたとは考えにくいだけでなく、その人物による（とされる）「現実の人間について書かれているから伝記を好む」という言葉を額面通りに受け取ることも、同様に困難である。ワシントンの反文学的姿勢について考察しようとするのであれば、まさしく『奴隷から』に記されているように、「表面よりも実を、見た目よりも中身を」（176）[(4)]汲み取っていかねばならないであろうし、そのためには、彼の表面上の「実物／本物」志向の「中身」を、探ろうとする努力が必要となるだろう。

2．ワシントンの自伝と「アルジャーもの」

努力する人は誰でも成功しうる、という「アメリカン・ドリーム」という考えについて、スモックは、「ワシントンを始め何百万もの同時代人たちは、そのことを（…）ホレイショ・アルジャーの小説から学んだ」と述べている（69）。では、同じスモックが「『奴隷から身を起こして』というのは、ホレイショ・アルジャーの本の題名であってもおかしくない」（68）と評している『奴隷から』の「中身」を、あるいは、この一巻が実際のところ、具体的にどれほど「アルジャーもの」的なのかを、検証してみよう。

奴隷制下の南部ヴァージニア州に、父親の名前も知らない（が、「近隣のプランテーションに住む白人であったようだ」[2]）という状況で生まれたワシントンの半生を追うのが、『奴隷から』という自伝テクストの骨子だ。少年時代を回想する箇所における、自分が「白人」であったら「いかにどん底から始めて最高の成功を収めるまで上昇するかを想像したものだった」（23）という、「アルジャーもの」の一作から抜き出してきたような一文が表しているように、この作品全体に通底する上昇メンタリティと、実際の上昇の過程を追うというその構成は、まさしく「アルジャーもの」を彷彿とさせる。

具体的な類似性にも目を配ろう。ワシントンが最初に学んだハンプトン・インスティトュート（Hampton Institute）で、彼が「用務員（janitor）」（38）のアルバイトをしていたというのも、1890年出版のアルジャー作品である『上に向かってもがけ（*Struggling Upward*）』の主人公を想起させるが、さらに「どれだけ完璧に教室をキレイにできるかに自分の将来がかかっている」と信じ、「誰にも文句が付けられないくらいに掃除しようと心に決めた」（165）というエピソードは、下手な「アルジャーもの」以上に「アルジャーもの」らしいと言える。また、タスキギーの校長就任後のワシントンが、熱心な生徒たちの多いクラスに与えた「勇敢組（The Plucky Class）」（61）という名前も、アルジャーが大ヒット作『おんぼろディック（*Ragged Dick*）』の二番煎じを量産し始めた1869年の作品『運気と勇気（*Luck and Pluck*）』を思い起こさせる。また、例えば『おんぼろディック』では「ウィットニー氏（Mr. Whitney）」、1880年の『探偵ダン（*Dan, the Detective*）』では「ロジャース氏（Mr. Rogers）」、そして『上に向かってもがけ』では「アームストロング氏（Mr. Armstrong）」と、主人公を経済的・倫理的に導き、適宜助言を与えるパトロン的人物が「アルジャーもの」には欠かせないが、『奴隷から』にも、ワシントンにとってのパトロン的人物として「アームストロング氏（General Armstrong）」が登場するだけでなく、その友人である別の人物が「父親のように（in his fatherly way）」、「忘れるなワシントン、信用というのは資本なんだ」（85）と助言する場面が描かれている。

こうした「アルジャーもの」的傾向は、『奴隷から』だけでなく、一作目の自伝であり、同じくゴースト・ライターによるものとされる『我が人生とその成果』にも見出せる。その第７章のタイトルが、「苦闘と成功（The Struggles and Successes）」という、アルジャー作品の書名を組み合わせたかのようなものであるだけでなく、この一巻を締めくくる最終章にある次の一節は、この本の著者はアルジャーではなかったかと再確認したくなる衝動を生じさせるものだ。

> 私は度々、どうやって様々な分野で成功を収めたのか尋ねられる。ほとんどの場合、私の答えは、「それには絶えざる、懸命の、そして良心に基づいた努力が必要だった」というものである。私は、賞賛を呼ぶような高い目標を

持った、懸命かつ厳しい努力なしに、継続的な成功というのは望めないと考えている。幸運とは、私の経験からすれば、勤勉の別名にすぎないのだ。（『ブッカー・T・ワシントン全集』［*Booker T. Washington Papers*（以下、BTWP）］V1 206）[5]

これらの文学的意匠は、単にゴースト・ライター個々人の責任で、ワシントンの意向は全く無視して組み込まれたものなのであろうか。当否どちらの確証もないが、彼の著書や講演原稿だけでなく、書簡も網羅した全15巻の『ブッカー・T・ワシントン全集』を渉猟しても、彼によるアルジャーへの直接的言及は見当たらないため、その可能性も否定はできない。しかし問題は、このような類似性が認められる「原因」というより、次に見るように、むしろそれがもたらした「効果」の類似性のほうなのだ。

3．ワシントンと「文学」の距離

スモックは、「ワシントンの人生」そのものが「アルジャー小説の一つのように読める」とさえ指摘しているが、『奴隷から』という自伝テクストが「アルジャーもの」との親和性を備えていた原因を考えるとすれば、それが「アルジャーもの」的であったというより、「アルジャーもの」自体が、19世紀末アメリカにおける自伝テクストの原型として機能しうる可能性を備えていたと同時に、「ボロ着から金持ちへ」型の自伝テクストの虚構性を先取りするテクストでもあった、と表現する方が適切なようにも思える[6]。どちらの説により妥当性を認めうるかは別として、1903年には「３万部」（BTWP V1 xxxiv）を売り上げていたという『奴隷から』のもたらした「効果」を考えてみると、同時代のアフリカ系アメリカ人読者からワシントンに送られた、賞賛の手紙を引用した後にBTWPの編者が記しているように、「この本は多くの黒人に成功モデルを提供した」のであり（同xxxv）、読者に19世紀末アメリカ社会で上昇していくためのロール・モデルを提供し続けた「アルジャーもの」と、まさしく類似した効果を生み出していたのであった。

このように、意識的にか無意識的にか、否定しがたい「アルジャーもの」的側面を備え、「アルジャーもの」的効果をもたらしていた『奴隷から』は、確かにワシントン自身が書き上げたものではないのかも知れない。しかし、だからと言って、「これらはあくまでゴースト・ライターによって編まれたテクストに過ぎず、ワシントン自身は『アルジャーもの』を始め、文学というものは嫌悪していたのだ」と、即断できるものであろうか。

『奴隷から』にある、奴隷解放宣言が発布された際、文字の読めるアフリカ系アメリカ人男性が、その場に集まった聴衆たちにその内容を語り聞かせたのを目

にして、識字能力の偉大さをワシントンが認識したという逸話から、彼は幼い時分に「識字力という魔法（the magic of reading）」あるいは「書かれた言葉の力（the power of the written word）」を認識したと、スモックは指摘している（27）。さらに、聖書から引用することが、人前で話をする、あるいはディベートを行う場面でどれだけ威力があるかを理解したワシントンについて、「このプラグマティックな人物は、それがどれだけ実用的であるかに気付き、聖書について熱心に学ぶようになった」とも述べているスモックは、ワシントンと聖書の関係を、次のようにまとめている――「［聖書］は、その霊的な価値のためだけでなく、ワシントンが言うには、文学（literature）として、なくてはならないものだったのだ」（48）。このように、「プラグマティック」な教育者にとって、「文学」も有用な/プラグマティックな商売道具として存在していたことは、忘れてはならない。もちろん、彼が「あまり好きではない」と明言している対象は「フィクション」であり、聖書は「文学（literature）」ではあっても、「フィクション」であると断言できるかは定かではない。しかし、そもそもBTWPで指摘されているように、彼の２番目の妻であり、彼に２人の息子をもたらした後に結婚から４年で死別したオリヴィア（Olivia Davidson Washington）と婚姻関係にあった間、ワシントンは「講演でも著述でも（…）古典や文学に頻繁に言及」しているのも、また事実なのである（BTWP V2 401）。このように、彼の文学への接近、あるいはそれとの距離の置き方からは、一貫性を感じとることがやや困難であると言わざるをえないのだ。

４．兎と狐

だが、そもそも彼の表面的な部分に一貫性を求めるのが困難なことは、最新の伝記的著作からもたらされた数々の情報によって、彼が「兎」から「狐」へとイメージを変化させていることを想起すれば、無理からぬことだろう。ここで、ますます複雑化してきている現在のワシントン像を確認してみよう。

ビーズによる、よく知られたテクストのみで彼を判断すると「彼の思考の多様性や肌理を捉え損なってしまう」（169）という指摘は、あまりにも正しい。というのは、彼が書く/話すトーンが、「白人」に向けた際には「優雅」に、「黒人」に向けた場合には「活動家のよう」に（17）、対象によって変化していただけでなく、その実際の行動も、「法的な差別や公民権侵害（…）に対する訴訟を、密かに組織し資金提供を行う」（Fisher 732）、あるいは「彼に敵対する白人や彼を批判する黒人を監視するスパイを雇う、そして秘密の書簡では暗号を用いる」（Smock 135）など、あまりに多様な側面をもっていたためである[(7)]。トマス・ディクソンの「黒人」嫌悪小説を映画化した『國民の創生（*The Birth of a Nation*）』が1915年に公開され、大きな反響を呼んだ折には、これに対抗する作品を撮ること

のできる映画監督探しに奔走するなど[8]、「彼の裏の顔（underground personality）は、表の顔よりも好戦的であり、複雑」なのであった（Smock 135）。

その一方で彼が世間一般に対して向けていた「表の顔」、あるいは兎としての側面は、どのようなものであったのか。

前述したように奴隷として生を受け、南北戦争後、これも前述したように「言葉の力」を認識すると共に学習意欲に目覚めた彼は、苦労して日銭を稼ぎながらヴァージニア州東部のハンプトン・インスティトュートに辿りつき、学費を賄うための雑役をこなしつつ勉学に励んだ。ハンプトンの組織内で一定の評価を得た後は、アームストロング氏に推されてアラバマ州のタスキギー・インスティトュートの校長に就任し、地域のアフリカ系アメリカ人に対する地道な教育活動で名を馳せる。1895年のアトランタ万博における、後に「アトランタの妥協（Atlanta Compromise）」とも呼ばれるようになった演説において、翌年にプレッシー対ファーガソン裁判（*Plessy v. Ferguson*）の結審に伴って出される、「分離すれど平等（separate but equal）」という悪名高い最高裁判決を前もって肯定するかのような、「純粋に社会的なあらゆる事柄においては、我々［白人と黒人］は五本の指のように離れていてよいが、相互の発展のために必要なあらゆる事柄においては、一つの手のように一体なのだ」（『奴隷から』129）という妥協主義的主張を披露して話題を呼び、毀誉褒貶の入り混じった全国区の名声を博したのだった。1896年にはその功績を認められてハーヴァード大学から名誉修士号を贈られ、1899年には「天国と同じくらい」（同 160）非現実的な場所と考えていたヨーロッパを、支援者たちの援助で周遊。そこで元大統領のハリソン（Benjamin Harrison）や、プレッシー裁判の判事たちとも同席し、さらに『奴隷から』刊行後の1901年10月には、「元奴隷の黒人」でありながら、大統領就任間もないテディ・ローズヴェルト（Theodore Roosevelt）と、ホワイトハウスで会談を行っている。その交友関係は甚だ広く、BTWPから確認できる限りでは、人類学者のボアーズ（Franz Boas）、百貨店経営者ワナメイカー（John Wanamaker）、民主党の大統領候補に複数回選出されたブライアン（William Jennings Bryan）、ハーヴァード大学の古生物学者シェイラー（Nathaniel Shaler）、そして文豪トウェイン（Mark Twain）と、極めて多様な当代きっての著名人たちと書簡の遣り取りを行っていることが確認できる。これら全てが、当時の北米における「黒人」一般の地位を考えれば、とてつもなく破天荒なものであることは言を俟たない。さらに彼はその死後、1940年に「黒人」として初めてアメリカの切手に肖像が採用されただけでなく、さらにこれもアフリカ系アメリカ人として初めて、1946年に半ドル硬貨に肖像が採用されているのである。このようにワシントンは、賛否両論ある政治的立場をとっていたにも関わらず、その絶妙なバランス感覚によって、まさしくスーパーマン級の先駆的アフリカ系アメリカ人として、アメリカ史に記

録/記憶されているのだった。

こうしたワシントンの二面性のうち、表の、あるいは兎としての顔だけを見ていた、直接の政治的利害関係を持たない人間は、彼をどのように捉え、さらにアフリカ系アメリカ人一般に対してどのようなイメージを抱いたのだろうか。その例を、我々は、当時のアメリカ文壇の重鎮ウィリアム・ディーン・ハウエルズ（William Dean Howells）の著述から窺い知ることができる。

5．兎としてのワシントン、あるいは、「模範的市民」

アメリカ文壇の趨勢が、リアリズム文学全盛期から自然主義文学の時代へと移り変わる移行期、さらに「白人」による「黒人」のリンチ殺人と隔離主義政策の拡大が猖獗を極めると共に、国家全体が帝国主義的拡張へと向かいつつあった混沌の19世紀末アメリカで、文壇の長老（dean）的存在として君臨したのがハウエルズである。彼はこの激動の時期に、1886年の『ハーパーズ（*Harper's*）』誌編集後記の中で、アメリカの小説家は「人生の微笑ましい側面を描くべき」（“Editor's Study” 641）という、いかにも能天気な見解を披露していたことが注目されたことにより、現代の文学研究者には軽視される傾向が強いことは否めない。

そのハウエルズがワシントンについて綴った文章である、1901年『ノース・アメリカン・レヴュー（*North American Review*）』誌掲載の「模範的市民（“An Exemplary Citizen”）」からも、確かにそうした能天気な一面は読み取れてしまう。例えば、上で述べたようなワシントンの上昇物語が、ハウエルズの手にかかった場合どのように語り直されるのかを見てみよう。彼は出版されたばかりの『奴隷から』を論じて、ワシントンは「奴隷に生まれたが、それよりも惨めで逃れようのないものである、貧困に生まれついたのではなかった」（281）と綴って読者を驚かせたかと思えば、北米社会の最下層の身分に生まれながら教育を受けようと粉骨砕身した話を、ワシントンが「シンプルかつ楽しげに（simply and charmingly）語っている」（282）と述べる無神経さを披露してみせる。さらに、法的にも社会的にも、人としてではなく動産としてしか扱われない奴隷としての境遇を、「しかしそのような生活条件は何も奴隷だけに特有のものでは」なく、「ニューヨークのイーストサイド」でも「ほとんど同じような状況」が見出せると主張して読者を脱力させるのであり（286）、相変わらずその現状認識が、極めて、嘆かわしいほどに甘いことを、白日の下に晒しているのである。

この、「人生の微笑ましい側面」しか見ようとしない人物であるハウエルズは、アフリカ系アメリカ人全般についてはどのように考えていたのだろうか。そう考えて次の記述に行き当たった時に気付くのは、「アトランタの妥協」演説など、「兎」としてのワシントンが流布させ当時のアメリカ大衆に植え付けてしまった、徹底

的に受動的な存在としてのアフリカ系アメリカ人のイメージを、ハウエルズが踏襲していることだ。

> （…）ニグロは、社会構造を揺るがすようなことは何もしない。彼らは社会をあるがままに受けとめ、少ないチャンスで出来るだけのことをするのみなのだ。苦々しさを内に秘めている、ということもない。権利が奪われても、返還されるまで黙々と働き続けるだろう。（285）

こうした「黒人」観を持つ、ハウエルズのような世紀転換期アメリカを生きる人間、あるいは「白人」にとっては、

> 彼［ワシントン］こそが、この状況を打開するカギを、その手にしっかりと握っていると言える。あるいは、アングロ・アメリカンの優位性（Anglo-American supremacy）を脅かすことなく（…）アングロ・アメリカンとアフロ・アメリカンを仲裁しようとする彼の企図がカギでないのだとしたら、何がカギなのか？（287）

このように、「アングロ・アメリカンの優位性」を脅かそうとしない、兎のような、都合のよい人物だと彼の目に映るからこそ、ハウエルズはワシントンを「最高に有用なアフロ・アメリカンであり、模範的市民」（288）と評するのである。

このように、ワシントンの表の、兎としての顔は、「模範的人物」としての彼の声価を高めるものであった。そもそも彼の「表の顔」とは、前節で確認したように「名声」とほぼ同義語であったとさえ言いうるものだが、その「名声」というものについて、彼自身がどのように考えていたかは、『奴隷から』にある次の記述によって明らかになる――「私は常々名声（fame）を、善を為す（accomplishing good）にあたって用いられるべきものと見做してきた」（174）。直後に続けて、それを「善を為す（to do good）ための道具」、あるいは「善を為す（for doing good）ための手段」とも表現するワシントンにとって、では、「善」とは、あるいは、彼の表と裏の様々な行動の目的とは、具体的には何だったのか。

彼は、確かに上で見てきたように、狡猾な、いわば「狐」的な側面をもっていた。だが、「狡猾な人間」を、「信用が置けない人間」と即断するのは、早計に過ぎるだろう。言うまでもなく、狡猾な人間とはその「手段」において狡猾であるに過ぎないのであり、その「目的」に対しては、むしろ忠実/誠実であるとさえ言いうるはずだ。そのことを確認した上で、「狡猾」なワシントンの「目的」が何であったかに話を移したいが、実際のところそれは、ここまでで論じた彼の表と裏の行動が、既に逆照射してくれているはずである。もちろんそれには、如何な楽天家で「兎」の顔しか見ていなかったはずのハウエルズでも気付いていたの

であり、彼は次のように洒脱な言辞を用いて、ワシントンの行動原理の一貫性が基づくところを喝破してみせている――「ワシントン氏の音域の中心音は、ビジネスである。そして、最初から最後まで全体を通して、彼の奏でる曲の聴かせどころは、タスキギー・インスティトュートなのだ」(283、強調は原典による)。では、さらに一歩踏み込むとすれば、ワシントンにとって、兎と狐の二つの顔を駆使してまで築き上げていたビジネスとタスキギーの先にあるものとは、何であったのか。

6.「人種全体の底上げ」

1899年出版の『アメリカン・ニグロの未来』に、「ヨーロッパのあらゆる国家(…)は、この20年、どこが一番アフリカの土地を多く接収できるか、狂ったような競争をしてきている」(160)とワシントンが記していることからも明らかなように、世紀半ばに第二次世界大戦を目撃することになる20世紀という時代が、西欧諸国による地球規模の植民地主義政策の実践で始まっていたことは、<自分たちこそが最初に戦争を起こした『悪者』である>と主張する向きの多い現代日本の政治的文脈では、呆れるほど鮮やかに忘却されがちだ。

軍事力だけを正義の基準とした、世紀転換期西欧諸国によるそうした狂騒の中で、「アフリカに移住しても、アメリカのニグロが状況を改善させられる望みはないと、これまで以上に確信」[9](『奴隷から』 167)した彼は、『アメリカン・ニグロの未来』には、「ニグロには(…)合衆国憲法で保障されている何物も諦めて欲しくない」(141)と、『奴隷から』には、「南部のニグロが(…)あらゆる政治的権利を与えられる時がやってくる」(137)と、同時代のアフリカ系アメリカ人たちを鼓舞するように書き記し、あくまで北米の地で彼らの生活を向上させることを、あるいは同時代的な言い回しを用いれば、「人種全体の底上げ(Racial Uplift)」を、目指したのであった。そのためにこそ彼は、「この人種の大多数が家を持っていないにも関わらず」、建築について学ばずに「言語や文学を」学んでいるという(BTWP V4 216)、当時のアフリカ系アメリカ人を取り巻く教育の現状を嘆いていたのであり、そして「南部の発展と安寧のために、白人は黒人の経済的機会の希求欲を、黒人は白人の隔離願望を、それぞれ尊重することが最善」(Andrews vii-viii)と考えていたからこそ、「分離すれど平等」を前もって肯定するように見えたとしても、あえて「アトランタの妥協」演説を行ったのである[10]。

デュボイスは1918年のエッセイに、既にこの世を去っていたワシントンを念頭に置いて書かれたものと読める、次のような言葉を残している。

現代的な産業に従事する技術を教えるために、書物や「文学修練(literary

courses)」を冷笑し、人の思考の偉大なる遺産を放擲してよいとする人間は、誰であれ、憐れなほどに間違っている。(873)

しかし実際のところ、ワシントンは「人の思考の遺産を放擲してよい」と考えていたのではなく、スモックの言うように、「自分たちには［「白人」社会と］表だって戦い抜く力はないと考え」(136)、経済的基盤の整備を優先させたと考えるのが妥当であろう。このワシントンのような優先順位の立て方は、同時代的に考えても決して異常なものではなく、『進歩と貧困（*Progress and Poverty*)』(1879年)で19世紀末アメリカにおける社会経済議論の寵児となったヘンリー・ジョージ（Henry George）も、「政治的権利の平等は、自然の恵みへの平等な権利を否定することの埋め合わせにはならない」(Smock 126）と主張し、政治的権利の獲得よりも経済的基盤の確保を重視していたのだった。

こうした考えの下、彼自身の表現を借りれば、『奴隷から』を「懐の暖かい、寄付金を期待できる部類の人々」(Andrews xi）の多い北部で流通させる明確な意図をもっていたワシントンは、彼なりの一貫性を持って、兎と狐の二つの顔を使い分けていたことになるだろう。そして、現実的には「黒人」の資産家が絶対的に少数であった世紀転換期アメリカにおいて[11]、彼が「白人」資本家の富に頼ったことは、どれだけ「後の世代の批評家たち」(Smock 124) に指弾されようとも、「人種全体の底上げ」を画策するワシントンが同時代の「白人」社会に現実的に抵抗しようとした際に、選択肢の筆頭に来たとしても批判することは難しい。

ここで、実際にどのような形でワシントンが「白人」資本家の富に頼ったのかを示す例として、彼とその最大の支援者の一人であったアンドリュー・カーネギーとの関係に触れておきたい。

世紀転換期アメリカ鉄鋼業の領袖として知られるカーネギーだが、彼が社会ダーウィニズム（Social Darwinism）の創始者スペンサー（Herbert Spencer）に私淑していたことも、忘れられるべきではない。元は単に「富（“Wealth”)」とだけ題され、後に「富の福音（“Gospel of Wealth”)」として知られるようになった1889年『ノース・アメリカン・レヴュー』誌掲載の代表的エッセイにおいて、同時代における貧富の差の増大を「有益」どころか「人類の進歩には不可欠」と評し（1)、文中で「適者生存（the survival of the fittest)」という表現さえ用いている彼は、「穀潰し、酔っ払い、無価値な輩」には施しを与えないように細心の注意を払う者だけが「真の改革者である」とも記す（11)、筋金入りの社会ダーウィニストである。しかし、彼が独特なのは、単に「弱者」や「適者でない者」を排除しようとするだけの人物ではなかったことだ。富裕層の生前財産処分を促すため、如何にも極端なことに「100％の遺産相続税を支持」(Nasaw xi）していたカーネギーは[12]、同エッセイにおいて、「意欲のある者が昇って来られるような梯子」(12）をかけることこそが富める者の使命であると主張しているので

あり、自身の富を社会に還元することに驚くほど意欲的な人物なのだった。

このカーネギーが、元奴隷の「黒人」であるワシントンを、「適者でない者」として切り捨てることなく、むしろ「現代のモーゼ」とさえ呼び（Smock 130）、彼の活動拠点であるタスキギーに60万ドル[13]という巨額の投資を行ったことは、一見したところ、ワシントンの兎の顔が奏功した事例の一つのように思える。だが真に括目すべきは、ここでカーネギーが、狐の顔をしたワシントンにも加担していたことだ。すなわち、この投資自体は世間に公表されたのだが、そのうちの15万ドルがワシントン個人への贈与であることは、公になることはなかったのである。だがこれは、決して彼の私腹を肥やすためではなく、ワシントンとその家族が「自身の収入をについて案ずることなく人種の指導者として活動が続けられるように」カーネギーが配慮したためであり、そしてワシントン自身が「富裕の身分になったと思われてしまうと、南部での活動が難しく」なり、「それ以降の運営資金獲得に支障をきたす」ことを憂慮したための措置なのだった（Smock 130）。これは、彼の兎と狐の両方の顔が、「人種全体の底上げ」を志すという彼の行動原理に沿うよう現実的に機能した事例として、特筆に値するだろう。

7.「モダン」な教育者としての「文学嫌い」

見てきたように、兎と狐の顔を持ち、陰に陽に様々に立ち回ったワシントンが目指していたのは、「人種全体の底上げ」なのであった。その彼が、「文学」を軽視していたという点に、最後に話を戻そう。

銘記しておきたいのは、これまで見てきたように、彼は「文学」全般を否定していたというより、あくまで当時のアフリカ系アメリカ人に対する制度化された「文学教育」を否定していた、ということだ。これは、今は無力な彼らに一定の経済的基盤をもたらすためには、まずは実学／職業訓練こそが必要であると、彼が考えたためであることは確かだろう。だがそれだけでなく、ワシントンの「文学教育」軽視について考えるにあたっては、当時のアメリカにおける教育界の状況を、意識の俎上に上げる必要がある。

ビーズらが指摘するように、当時の「教育学者の間で主流」であった「ラスキン（John Ruskin）に依拠」するなど（143）、ワシントンは教育学的な方法論に対しても決して意識の低くない人物であった。だからこそ、そもそも本稿冒頭でその論を叩き台としたフィッシャーが論じてくれているように、同時代において「職業訓練と文学的修練を厳密に分けることを拒否し、あらゆるモダンな教育は必然的に職業志向的であるべきだと主張」（732）していたデューイ（John Dewey）のような進歩的教育学者たちは、ワシントンの方法論に、「教育は（…）実生活に即すべし、というヨハン・ペスタロッチ（Johann Heinrich Pestalozzi）

の学説」（731）を重ねて見ていたのであり、またそうした「モダン」な方法論が台頭してきたことで、「伝統的な読書偏重学習（book learning）は、教育学的に時代遅れ」（同）となっていたのである。

ハウエルズも指摘していたように、ワシントンの「音域の中心音はビジネス」であり、彼の「曲の聴かせどころはタスキギー」であったのであれば、彼にとって、タスキギーで行われている教育が「時代遅れ」ではない、むしろ「モダン」なものであることを世間に訴えかけることは、そもそも兎でも狐でもなく「教育者」が本来の存在様式であった彼にとって、是非とも必要なことであったに違いない。つまり、彼の自伝的著作に見られる「文学」軽視の身振りは、彼が「表象はモノ自体に劣る」という考えを持っていたためというより、彼が「人種全体の底上げ」のための拠点として運営する教育機関において、当代における最も「モダン」な教育が行われていることを、アメリカの読書界、教育界、ひいては北部にいる潜在的な出資者たちに、アピールするためのものではなかったか。

彼が、表面上だけでなく実際に「文学」を軽視していたのか否かは、つぶさには判断しがたい。あるいは、むしろ彼は『奴隷から』との共通性が度々指摘される「アルジャーもの」を、密かに読み漁っていたかも知れない。だが、実際の個人的な嗜好がどうあれ、ワシントンは、アフリカ系アメリカ人に身の丈にあった教育を授け、その生活の質を向上させるために、ゴースト・ライターを介した自伝的著作において、表向きには文学を軽視する姿勢を打ち出すことで、彼らの手に職を付けさせることを促すと同時に、「文学」教育を特別視しない「モダン」な教育をタスキギーで実践していることを内外に知らしめ、「人種全体の底上げ」に資するためにさらなる教育体制の充実へと繋げようとした――このように考えた方が、「表象はモノ自体に劣る」という理由から彼が「文学」を軽視したと考えるよりも、より現実的であるように思われる。

こうして、『奴隷から』を始めとする自伝的著作に見られる、ブッカー・T・ワシントンの「文学」軽視の理由を考察してきたが、特に彼の最もよく知られた著作である『奴隷から』は、ゴースト・ライターによるものとはいえ、彼自身が「奴隷から身を起こ」したという現実を自伝的に物語るだけでなく、将来的にアフリカ系アメリカ人全体に「奴隷から身を起こ」させるための企図でもあったことは、彼が世間に見せていた/いなかったどの顔を考慮に入れても、揺らぐことのない事実であろう。しかし、冒頭で触れた2008年の米議会の決議によって、アフリカ系アメリカ人が完全に「奴隷から身を起こ」し終えたと、ワシントンの意図していた「人種全体の底上げ」が真に実現したと、言明できるのかどうか。それはまた、別の問題である。

註

（1）以下、引用は全て拙訳による。

（2）オックスフォード版『奴隷から』の編者であるアンドリュース（William Andrews）は、その序文において、「『奴隷から』を語るのに、アメリカの原型的成功譚であるベンジャミン・フランクリン（Benjamin Franklin）の『自伝（*Autobiography*）』を引き合いに出す向きもある」（xiv）としているが、筆者が渉猟した限りの資料からは、そうした傾向は見い出せなかった。いわゆる「アルジャーもの」とフランクリンの『自伝』のそもそもの類似性に関しては、拙著『外見の修辞学』（春風社、2018）の第二章「衣服は人を作らない」第二節を参照されたい。

（3）“the real thing”というフレーズが、19世紀末に頻繁に使われた用語であり、「本物」以外にも「類型」や「典型」といった意味で用いられていたことについては、ヘンリー・ジェイムズ（Henry James）による短編作品を論じた拙著『外見の修辞学』第三章「あるリアリズム作家の~~『写真』~~『肖像』」を参照されたい。

（4）この言葉は、ハーヴァードでの名誉学位授与式後の晩餐における演説内の一節であり、その前後も引くと、「我々［アフリカ系アメリカ人］は、自分たちの優秀性を（…）、商業で成功する能力を、表面よりも実を、見た目よりも中身をとる能力を（…）試されるであろう」と続く。

（5）たとえば、1890年の「アルジャーもの」である『上に向かってもがけ』の最終段落は、次のようになっている。

> ルーク・ラーキンの生涯における、波乱に富んだ一幕は、こうして幕を閉じる。彼は、困窮し自制を強いられた少年時代から、成功と栄誉に彩られた青年期そして壮年期へと、上へ向かってもがき通したのである。そこにある程度の運が介在したのは認めよう。だが、詰まるところ彼の幸運のほとんどは、彼自身の善き性質に端を発したものなのである。（280）

（6）ここで、本稿でも後で触れるアンドリュー・カーネギー（Andrew Carnegie）の、13歳で移民の子として北米に渡った後に出世を重ね、遂にはアメリカ鉄鋼業を掌握するに至った、という経歴も、まさしく「『アルジャーもの』的である」ことを想起してもよい。

（7）彼は、既に袂を分かっていたはずの「デュボイスとさえ内密に共同して、1902年のジョージア州寝台車両隔離法に対し」、対抗措置をとってもいた（Smock 154）。

（8）ワシントンの死後、1918年に公開の運びとなった『人種の創生（*The Birth of a Race*）』と題された映画作品は、しかし、「決して『國民の創生』とは、成功という面で比較にはならなかった」（Smock 203）。

（9）この「確信」は、イギリス滞在中に著名な探検家ヘンリー・スタンリー（Henry Morton Stanley）と会い、意見を交換する中でワシントンにもたらされたものである。

（10）当初この演説を賞賛したが、後になって「安売りし過ぎであった」（Smock 4）と批判した同時代の「黒人」の中には、1895年９月の時点では「アトランタでの並外れた成功を心から祝福したい。あれは全く適切な言葉だった」と述べていた（Smock 99）、ウィリアム・デュボイスも含まれる。

（11）ショマリ・ウィルズ（Shomari Wills）が2018年の『黒人資産家（*Black Fortunes: The Story of the First Six African Americans Who Escaped Slavery and Became Millionaires*）』で紹介しているように、19世紀末にアフリカ系アメリカ人の資産家が存在しなかったわけではないが、奴隷解放からわずか30年あまりの世紀転換期、その数はあまりにも限られていた。

（12）残念なことに、石油王ロックフェラー（John Davison Rockefeller）の他に、このカーネギー

の大胆な趣旨に賛同した者の「記録は残っていない」(Nasaw xii)。
(13)現代の「円」に換算すると、恐らく100億円を優に上回ると思われる。

引用文献

Andrews, William L. Introduction. *Up from Slavery*. By Booker T. Washington. Oxford: Oxford UP, 2008. vii-xxii.

Bieze, Michael Scott, and Marybeth Gasman, Eds. *Booker T. Washington Rediscovered*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 2012.

Carnegie, Andrew. "The Gospel of Wealth." 1899. *The "Gospel of Wealth" Essays and Other Writings*. New York: Penguin Books, 2006. 1-12.

Du Bois, William Edward Burghardt. "Negro Education." 1918. *Writings*. Ed. Nathan Huggins. New York: Library of America, 1996. 868-878.

Fisher, Laura R. "Heads and Hands Together: Booker T. Washington's vocational Realism." *American Literature* 87. 4 (2015): 709-37.

Harlan, Louis R., and John W. Blassingame, Eds. *The Booker T. Washington Papers*. Vol. 1. Urbana: U of Illinois P, 1972.

Harlan, Louis R., and Pete Daniel, Stuart B. Kaufman, Raymond W. Smock, William M. Welty, Eds. *The Booker T. Washington Papers*. Vol. 2. Urbana: U of Illinois P, 1972.

Harlan, Louis R., and Stuart B. Kaufman, Barbara S. Kraft, Raymond W. Smock, Eds. *The Booker T. Washington Papers*. Vol. 4. Urbana: U of Illinois P, 1975.

Howells, William Dean. "Editor's Study." *Harper's* 73 (1886): 639-43.

————. "An Exemplary Citizen." *North American Review* 173 (1901): 280-88.

Nasaw, David. Introduction. *The "Gospel of Wealth" Essays and Other Writings*. By Andrew Carnegie. New York: Penguin Books, 2006. vii-xiii.

Smock, Raymond W. *Booker T. Washington: Black Leadership in the Age of Jim Crow*. Chicago: Ivan R. Dee, 2009.

Washington, Booker T. *The Future of the American Negro*. 1899. Miami: HardPress Publishing, 2013.

————. *Up from Slavery*. 1901. Oxford: Oxford UP, 2008.